

Title	外者款待傳説考
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.1- 26
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0001

史學

第九卷 第一號

昭和五年三月

外者款待傳説考

『常陸風土記』筑波山の條に見えた次の傳説は、此山に何故人民がつごひ、飲食を豊かにもたらし、奠り、遊び樂しむか、富士の山は、之に反して何故に四時雪に閉され、人民の登臨不可能なるかを説明した一種の説明傳説である。

古老の曰く。昔、祖神みまぢの尊、諸神の處に、巡行めぐりいでます時、駿河の國、福慈の岳に到りまして、卒つひに、日暮に遇ひぬ。宿らまく欲りすと請ふ。この時、福慈の神、答へつらく、新粟わせの新嘗にひなめして、家内やうち、諱もの

忌せり。今日の間は、冀許不堪じ、といふ。是に祖神の尊、恨み泣きて、詈り告曰く、即ち、汝が親を、何も、宿さまく、欲りせぬ。汝が居る所の山は、生涯の極み、冬夏、雪霜、冷寒重襲に、人民登らず、飲食、な奠きそとのりたまへり。更に、筑波の岳に登りて、亦た容止を請ふ。この時、筑波の神答へて曰く、今夜新粟嘗すれども、敢て、尊旨を、奉らずむばあらずと。爰に、飲食を設けて、敬拜祇承へまつりき。ここに於て、祖神の尊、歡然び誦ひたまはく、愛しきかも我胤、巍さかも神宮、天地と竝齊しく、月日とあなじく、人民、つごひよろこび、飲食富豊に、代代、絶ゆることなく、日に彌や榮えて、千秋萬歳、遊樂しみ、窮らじと、のり玉ひき。是を以て、福慈の岳は、常に雪ふりて、登臨るを得ず。その筑波の岳は、往集ひ、歌ひ舞ひ、飲喫ひすること今に至るまで絶えず云々。右の傳説を解釋するのに忘れてならないのは、之が筑波の山のかゞひと、關聯してをることである。即ち風土記は、つゞいて次の文を録してをる。

夫れ筑波の岳は、高く雲に秀で、最頂、西の峰は崢嶸し。之を雄の神と謂ふ。登臨らしめず。但し、東の峰は、四方、磐石にして、昇り降り、決屹しく、其の側に、流泉ありて、夏冬絶えず。阪より、以東の諸國の男女、春は花の開ける時、秋は葉の黄づる節、相携ひ、駢闐り、飲食、齋齎し、騎歩登臨り、遊樂栖遲り。その唱に曰く、「筑波嶺に、會はむと言ひし子は、誰が子と聞けば、かみね遊はけんや」。「筑波嶺に、廬りて妻なしに、我が寝む夜ろは、早も明けぬかも。」詠ふ歌、甚と多し。載車に

勝へず。俗の諺に、筑波峰の會に、娉ひの財を得ざれば兒女とせず。

前條の傳説は、附近の人民が飲食をもたらし、遊樂する原因は、もと筑波の山神の物惜みなく祖神を欸待したためにありとし、つゞく記文は、その遊樂が、諸國に存する歌垣と同一種類に屬し、男女の自由なる交際が行はれ、また女子は、戀人の贈物を得たことを述べてをる。

筑波のかゞひは、萬葉集によつて一層その性質が明白となる。

登_ニ筑波嶺_ニ爲_ニ耀歌會_ニ日作歌一首并短歌

驚のすむ筑波の山の裳羽服津の其津の上に率ひてをとめをとこのゆきつぎひ、かゞふ耀歌^{かゞひ}にひと妻に吾も交らむ、わが妻に人もことごとへ此山をうしはく神のむかしよりいさめぬわざぞけふのみはめぐしな見そ事もとがむな

(反歌)男の神に雲たちのぼりしぐれふりぬれとほるともわれかへらめや(萬葉集卷九)

即ち此日妻の交換もゆるされたのである。女に對する所有權の緊縛がたゞれたのである。女が男に操を呈供するのにたいし男は、財物を贈つた。もたらせられた飲食は、恐らく共同に分配會食されたのであらう。その一部がまづ山神に奠られたことは、傳説から察せられる。戀歌を歌ひかはして男女が、いざなひあふ興奮した場景の傍に、美酒佳肴を取り圍み、あらゆる階級のものが、今日だけは無禮講で大共同宴席を開いてゐたさまを想像することが出来る。このかゞひには今までみも知らぬ他村の人と相會

することが出来た。(標註古風土記、常陸、香島郡童子女松原の條參照)。もたらされた飲食財物も、濱の人は、海の幸、山の人は、山の幸と自ら種々な相違あり、飲食財物の交換によつて、此處に平常見られぬ流通が實現されたらしい。この日はいかなる人々の間にも物惜みなき饗應贈與がおこなはれたものであらう。女は、その欲つするまゝに情人を選んだ。大和の國の歌垣ではたとひ不日天津日嗣たるべき高貴の人も、その妻を選ぶ争ひに敗者たらねばならぬ場合があつた(日本書紀、武烈天皇・古事記清寧天皇の條參照)。この日はひごろの權力階級の支配權も消滅してしまふ。人はたゞ原始的のコンミニズムに歸してしまふ。かやうな祭が春と秋に筑波の山に行はれたのである。

風土記所載の傳説は、筑波の山にかゝる祭の行はれる原因は、山神が、曾つて新嘗の夜に巡行する客神を歎待したからだとなすのである。物惜しげなく與へる祭が、客神を拒まずに歎待したといふ昔物語と關係づけられてゐるのである。

新嘗の祭は、萬葉集卷十四東歌の中にも歌はれてゐる。

鳩鳥の葛飾早稻を贅すとも彼の愛しきを外そとに立てめやも

誰ぞ。此家の戸押ふる。新嘗忌にふなみに、わが夫を遣りて、齋ふ此戸を

折口教授がその「古代研究」の中に説明されたごとく、この歌は、新嘗の夜に、神事に與らぬ男や家族が脇に出拂ふて、家の處女か主婦が巫女として家に残り、おどづれる神を待つてゐた場景を讀んでゐる。

「前のは早稻を煮たお上り物を奉る夜だと言つても、あの人の來て居るのを知つて、表に立たして置かれようか、と言ふ處女なる神人の心持ちを出した民謡であり、後のは亭主を外へ出してやつて、女房一人、神人としての役をとり行うて居る此家の戸を、つき動かすのは誰だ。さては忍び男だと言ふ位の意味である」(古代研究一卷二〇六頁)。

新嘗の祭は、古くより宮中において行はれてゐたことは、神話を通じて想像することが出来る。天照大神は、新嘗にひなへする時その新宮の席の下を素戔鳴命にけがされたのをいかつて岩屋に隠れ給ふた(日本書紀一書)。天稚彦が新嘗にひなへして、休臥せる時天より落下した矢が、たかひなさきをつらぬいた(古事記)。新嘗の祭の本旨は、早稻を神に饗應し、祭主も之にあづかるにある。神はあそらく何人かの假裝せるものであつたらう。夜ひそかに訪れるかゝる神人を齋戒せる家の巫女は、獨り齋屋に待ち、之に早稻を煮て奉り、自らも喰ふたのである。訪れる神をこばみ、この祭を不首尾に終らしめることは、福慈の神の如く永久に食物の源を絶たれてしまふ恐れがある。古風土記逸文にひいた備後風土記の一節は、こういふ結果の恐しい一例を語つてをる。

疫隅國社(えのくまのくにの社)、昔北海に坐しし武塔の神、南海の神の女子を、與波比よはひに出で坐しけるに、日暮れたり。彼所に、蘇民將來、「巨旦將來」と、二人在りき。兄の蘇民將來は甚と貧しく、弟の巨旦將來は富饒にぎはひて、屋いへも、倉も、百ばかりありき。爰に、武塔の神、宿處を借り給ふに、惜みて

借さず。兄の蘇民將來は借し奉る。即れ粟柄もて座みましと爲し、粟飯等を以て饗みあへたてまつる。饗奉ること畢へて出で坐せる後に、年經て、八柱の子を率て還り來て、詔りたまはく、我れ將來の爲めに報いせん、汝が子孫、その家いへにありや、と問はし給ふ。蘇民將來、答へ申さく、己れ女子とこの婦侍をんならふと申す。即ち詔り玉はく、茅の輪をもて、腰の上に着けしめよと、詔り玉ふまゝに、着けしめき。その夜に、蘇民と、女人二人とを置きて、皆悉に、ころしほろぼしてき。その時に、詔り給はく、吾は速須佐能雄能神なり。後の世に疫氣えやみあらば、汝、蘇民將來の子孫と云ひて、茅の輪を以て腰の上に着けよ。詔のまゝに着けしめば、即ち家なる人は免かれなむと詔り給ひき(釋日本紀)。

此傳説は、新嘗の夜とは關係ないが、訪れる神をこばんだ結果村に大凶害の起つたといふ筋である。蘇民將來や筑波の神の如く客神をこばまず饗應することは、凶害をさけ、または食物の豊富を保證する。神は千倍萬倍にして饗せられた物を返して呉れる。こういうふ素朴な宗教信念に此形式の傳説は構成されて居るのである。

此處で注意しなければならぬことは叙上の傳説が、世界に弘く流布してをる民譚であり、同じ様な型の話が近隣の諸民族の中にも存することである。善人と悪人の二人がをり、一方が巡行する神に好意を表して成功し、一方が之を虐待したため失敗する。此形式の民譚に弘法大師の貰ひ水の話も數へられる。

ことが出来る。これは悪い婆と善い婆とがたつた一杯の水を惜しんだか與へたかによつて片方はいつまでも井戸の水が赤くて飲まれず、他の片方は、非常に良い水を弘法大師から貰つたといふ類の傳承である。霜月二十三日の晩に國中の村々を巡り、小豆の粥をもつて祭られただいし様といふ神ありしこと、人間の幸不幸はこういふ神様に對するわれ／＼の行ひの正しいか正しくないかによつて定まるといふ古風な考へ方がかゝる話の基礎になつてをるらしいと柳田國男先生は考證されてをる（柳田國男氏「日本傳説集」三五頁―六八頁）。

此型の説話に於て神を宿泊させるといふことよりも神に食物を與へるといふことが重要であつたらしい（松村武雄氏「外者款待と民譚」民俗學二の一號九頁―十一頁）。その意味で私はアイヌ人の説話「山の刀禰海の刀禰物語」も同形式の民譚に數へたいのである。

パナンベとベナンベと云ふ二人の男がおる。パナンベが或日魚を獲りに行つて舟一ぱい鮭を積んで歸つてくる。川岸に瘦せ衰へた一匹の犬がをる。パナンベの舟を見て、羨ましそうな様子をしてをるので彼は、一番肥えた大鮭をよく洗つて與へる。犬は口に啣へ後を幾度も振り返りながら行くのをパナンベは見送つて居る。自分も其後に行き度くなる。そこで陸に上り、見え隠れについて行く。大きな金の家に出る。前には澤山の男女が餅をついてをる。中に入る。爺と婆が坐つてをり、爐をへだてて一人の若い女がをる。爺がいふには「自分は犬の王で此娘が、さきほご貴方に大好物な魚を、しかも一番大い魚をいたゞいた御禮に御招きした。魚をいたゞき一族大悦びで集り、餅をついてをるから、今宵はお泊りになり、充分召しあがり、明日は御家に御歸りなさるやうに」と。それからパナンベは餅の御馳走になり、大勢の人達は、先刻の魚を煮て賞味しながら喰ふ。パナンベが腹一ぱいになる。東の窓の下にその寢床がしかれ、そこにパナンベが寝た。翌朝また餅の御馳走となり、金と銀の小犬の中どちらでも欲しいのを土産として選べといは

れたさき、銀の小犬を貰つて歸る。みちすがら爺にいはれた以上に小犬を勞はり、小犬が腹の空いた時には、自分は餅を半分しか食はず、銀の小犬には丸まゝの餅を二つも三つも食べさせ、小犬を荷の上のせて家に歸る。そして犬を愛撫して澤山食べさせ枕許に寝せ、自分もぐつすり寝込み、翌くる朝起きて見ると、枕下には小犬の影もなく、そのかはり家中寶物で一杯になつてをる。そしてパナンベは大層な金持となつた。

パナンベ之をうらやんでその仔細を聞き、魚を獲りに出かけて、船に魚を満載して歸る。そして瘦せた牝犬にであふさ、一番小さい鮭をわざと砂まみれにしてなげやり「この、ほいさ犬め、腹でも空つたのか？惜しい魚だが呉れてやるから、たんさ俺様に御禮をしろ」といふ。犬は悲しげにその魚をくはへ、振り向きもせずに行く。パナンベは、後をついて例の大きな家の前に出る。中に入る爺はパナンベをしかりつける。しかしパナンベは平氣で、餅を腹一杯たべて東窓の下に寝る。そして大勢の人達も小さな魚を煮て互ひに分配し食べる。あくる朝爺は「お前の様な人間に禮をする必要はないのだが、どんな砂まみれの魚でもお前の獲つた物を我々が食べ、私の家にお前を泊めたりしたのだから土産物だけは呉れてやらう。金の小犬が欲しいか、銀の小犬が欲しいか」といふ。パナンベは金の小犬を選び、之を邪険に歩かせて歸り、犬の腹の空いた時も自分が餅を二つも三つも食べ、小犬には一つも與へぬ。家につくさ金の小犬を隅の方に投げつけて床につく、そして夜中も一睡せず神の寶物の降つてくるのを持つて夜を明かす。あくる朝起きて見るとあにはからんや、家一ぱい犬の糞で例の金の小犬の影はない。箒で糞を、掃き出せば又其の上に新しく犬の糞が降り積る。かくてパナンベは掃いて掃いて遂に疲れ死んでしまふ。(知里眞志保、山の刀禰濱の刀禰物語、民族二の四・六四―七四、二の五・三九―

五八)

此説話は恐らく幾分日本の花咲翁などの説話の影響を受けてゐるらしい。然しその本筋に多くのアイヌ的特色を持つてをる。たとへば動物はその本國に於て人間の姿で生活してをるといふ考へはアイヌ的

である。善人は犬に澤山の食物を與へ、その報酬で犬の國の客人となり、土産を貰ふ。犬の王は、貰つた鮭を一族で分配する。善人はつれてかへつた小犬に食物を澤山與へ、之を枕下にねかせ、その報ひで金持になる。悪人は、その反對に小さい鮭を與へ犬の王は、彼に、御禮をする必要はないのだが、お前の呉れた鮭を皆で食べたからその返禮をするといひ、悪人はこうして貰つた小犬に食物もやらないで隅の方になげすめてその報ひでついにころされる。

アイヌの説話はシベリアの古亞細亞族の民間傳承に類似する所多く、また、アメリカ印度人の所傳と一脈相通する所がある。先人の既に説く如く是等民族の文化は同一の北太平洋文化圏内に屬してをる。ボアスの集めたチンシアン印度人の神話の中にもやはり客人を款待して富をえた人の話がある。

四人の酋長と灰色熊の頭領

大昔大洪水以前人々がスキーナ河の上流に住んでゐた頃四人の兄弟の頭目が住んでゐた。何れも家を持つてをり、人民を大切にするので衆の誇りとなつてゐた。

或非常な厳しい冬全ての食料が盡きてしまつた時四人の兄弟は各自毎朝其家で火を焚き、彼等の生存してゐることを人々に知らした。然し他の者は餓死に瀕してゐた。多くの人間が餓死してゐたので毎日彼等は火を焚いて食物が豊富なることを示した。

或夕方やせた男が河を氷傳ひに下つてきた。そこで酋長の中一番手長者が従者を遣して之を呼び、その家に招じ入れた。男が入つ

てくるさ、焚火の傍に敷物を敷いて、坐せしめ、「お前さんが家を離れてから何日たつたか」と聞くさ、男は答へて云ふ。「随分日がたちました」。その間一體何を食べてゐたのです。「道中たべてゐたのは雪ばかり」。そこで主人は、從者に命じ、木皿に雪を持つてこさして客人にすゝめた。男は雪を食はず、立ち去つてしまつた。

また或日夕暮ちかくやせ男が村に來た。これを聞いた第二の會長は、從者を遣して家に招じ入れ、爐の傍に敷物を敷き、之を坐せしめ、彼にこう聞いた。「家を離れてどの位ひですか。」「もう随分日數がたちました。」「道中何を食つてゐたのです。」「雪ばかり」。そこで會長はまた從者に木の皿に雪を持つてきて接待させた。男は之を食せず、立ち去つてしまふ。

或日夕暮また青年達が遊んでをるさ森の中から例のやせ男がやつてきた。第三の會長が之を招きいれて兄達と同様な目に遭はす。饑饉は依然として續いてをる。或日の夕暮やせ男がまた森から來た。村の人は四人の中一番若い頭目に此事を傳へた。そこで彼はその從者さ甥の一人さを遣し、之を招じ入れた。男が家に入るさ家人は敷物を火のそばに敷き、客人は其上に坐した。四番目の會長は云ふ。「私は三人の兄の貴方に對する仕打を聞いて、大變恥ぢおつてゐる。ほんさになさけ知れずです。自分の家を訪れる外者よそものによく親切心のない人だ。實際あの人達は悪人です。」「それからその妻に向つて「お前の箱に干鮭の残りがあるかどうか見て御覽」さいつた。そこで妻は、たつて空の鮭箱に行き、たつた一匹の残つた大い干鮭をさりだし、その半分を切り、炙つて皿の上に置き、やせ男に與へた。彼が之を食し終るさ、會長の甥は、乾漿果ベリを水に浸し、生の赤漿果ベリを混じ、之をやせ男に與へその他いろくの食料をだしてもてなした。皆の食事が終るさもう眞夜中である。主人はやせ男に向つて云ふ。「何時あなたは家に歸られる。」「今晚の中に歸りたる御座います。そこであるじは其妻に「この頭目に干鮭の残りの半分を御あげな。」と命じた。男はその晩の中に暇をつける。

たち去る前彼は主人夫婦さ甥に次の如く述べて禮をした。「私に親切であり、この饑饉の烈しい季節に糧食の最後の一片まで恵んでくれたことは實に有難い。私は貴方の兄達の家を訪れたのに、皆自分を嘲弄し、雪ばかりで接待した。それゆゑ貴方の御親切に報ゆるため明朝貴方に貴い飾章クレストを贈らう。明朝早く、もし彼方で物音を聞いたなら貴方の兄さんに先んじカノ一をこいで甥御さ奥さんさで行つてごらんさい。その時貴方だけに贈物をさしあげやう。」「こういつて彼は立ち去つた。

酋長とその妻はその夜一睡もせず、翌朝未明に若い酋長は河の向岸に歌の様なもの音を聞いたので、起き上つてその甥と妻とを呼び對岸にわたつた。岩崖の下に着くと、叫び聲が上に聞える。見よ！四つの飾章、^{クレスト}即ち灰色熊の帽子(假面)と二つの赤い脛當をつけ弓をもつた一人の男が下つてくる。今一人の山羊の帽子(假面)をつけた男と「生ける蛙」、^山の泉のきざまれた二つの大皿をもつた女が下つてくる。そして彼等は喪歌を歌つた。

アイユ・ワ・ホーホー・ヒー・ハーハーハーアー・幾度も之を繰り返し歌ひ終ると、一人は灰色熊の帽をとり、之を頭目に與へ、また赤色の脚絆と手にせる弓も之にあたへた。山羊帽をかぶれる青年は、その帽をさつて酋長の甥に與へ、女はその二つの皿を頭目の妻に與へた。それから彼等はまた岩崖をかけたのぼり、その姿は三匹の灰色の熊と變形した。

後に三人の兄も對岸の物音をき、いそいでカノーで川を横切つたがもう遅すぎ、かへつてくる弟とすれちがつた。そして彼等は空手でひき歸してきた。

このことがあつてから若い酋長は全ての人々の中で一番富裕な者となつた。冬の饑饉が續く間彼はあらゆる食物、あらゆる脂、あらゆる皮を豊富に獲得した。彼は全ての人々を養ひ、その三人兄弟をさへ恵んでやつた。そしてその人民全ては彼にあらゆる財産を贈物として齎した。

冬の饑饉が終る前、彼は河岸の全ての人民を招き、彼等に財産を分け與へた。分配するまへ財産をつみながらその山羊帽をつけ、喪歌をうたひ、かくてその飾章、^{クレスト}その喪歌は、その後幾世代もその家族のものとして傳へられるやうになつた。

彼は今一度宴會を開き、全ての部落を招待し、灰色の熊の帽と赤い脚絆をはき、その隄の弓を持ち、灰色熊から貰つた喪歌をうたつた。

それからその妻は客人達に、同じ熊からもらつた二つのきざんだ皿を示す、そのとき頭目は、誰も是等の飾章と喪歌を使用してはならぬ、彼の子孫の民族のみが代々使用なし得るのであると宣した。彼は灰色熊がその親切に報ゆるためにあたへた新しい頭目の名「ネース・ナラ」を名のつた。

三人の兄は、末弟をねたんだけれども全部族の人民達は、彼を愛し、あがめ、その名聲は高まり、その部族は、全ての頭目の中に於て最も富裕なる彼等の酋長を誇りとした(以下省略) (Franz Boas, *Tsimshian Mythology*, p. 292-296, 31 et *annual report of the Bureau of American Ethnology*, 1909-10.)

此話の中に注意しなければならぬのは、訪れる熊の神に最後の食糧まで與へた末の弟が、熊から報酬として飾章^{クレスト}を得、豊富な食糧を得るといふ筋である。チンシヤンの各民族は、いづれも或動物と關係を持ち、その動物の飾章^{クレスト}を有してをり、特有の喪歌と名をもつてをる。この説話は、何故に或氏族が、特定の動物の飾章^{クレスト}を有するやうになつたかを説明する數多い神話の中の一つに屬してをる。食糧を得ると全てのものに分與する。貰つたものは贈物をして之に報ゆる。またその氏族の特權として飾章と喪歌及び名を採用するとき、酋長は人民全體を招待し大饗宴を開き、財物を分與する。これはアメリカ印度人の間にポトラッチとして知られてゐる慣習である。此饗應、財産分配を伴はねば新しい特權獲得は出來ない。此種族に於ては財産は、分配せられんがために蓄積せられるのである。蓄積そのものが目的ではない。此點に於て近代社會と正反對である。

チンシヤンにあつては、動物はやはり本國では人間の形で生活してをると信ぜられてをる。人間に殺され、食用に供せられてもそれが方式にかなひ、タブーを犯さなければよいのである。殺して一部分を食はずに殺してゐいたり、骨を焼かずに捨てたりしてをくと、その動物はその自分の本國で病人となつ

て苦しんでをる。こゝにいふ考へ方はアイヌ族と同様である。

アイヌに於ては鳥獸蟲魚一切の生類は、神で、自分たちの本國に、この世の人間の形態で生活してをる。彼等が時々人間の國土に遊びに下つてくる時鳥獸蟲魚それぞれの姿に假裝してくる。神々は、アイヌの手にその變裝を解かれ、そして、喜んで食べられ、篤く敬されて始めて神の國へ房られるものなので、従つて熊でも梟でも鮭でも、その肉、その皮は、——即ち變裝は、神の苞として、捕られたアイヌに恵み、アイヌはそれを授かつて、篤く感謝してたべる。下界に遊びに降つた神は、さうしてのみ神國へよく房られるものだと考へられてをる(金田一京助・「熊祭の話」民俗學一の一・七七頁—七八頁)。

アイヌにとつては動物を捕獲して歸る時は、即ち神の訪づれであり、之を客人として遇しなければならぬ。頭骨には削花を飾り、供物をそなへ、「家苞」を持つて父母の家に歸りなさいといつて「送る」。こゝにいふ神送りの中最も盛大なのは熊祭り即ち熊送りである。熊はアイヌの最も心に懸くる神である。山で熊を捕り、皆で食べてその靈を厚く送るばかりでなく、熊の子を生禽し、大きくなるまで飼つて置いて、後之を殺し、人々を招待し、盛大な送りを行ふ。燕樂は三日三晩つゞき、第一日の晩は、家の横座で頭の腦味噌や舌や眼球を取り去りて削花を詰め、下顎の皮を剥ぎ、骸送といふ重い秘密の式を行ひ、此には女子を交へず、深夜に嚴かに行はれる。二日目は大饗と云つて皆と一所に肉を食し、三日目

は小宴ボンオメカンと云つて前日の繼續が行はれる(前引論文、八一頁―八四頁)。

之と同様の習俗は、シベリアの古アジア民族の間にも存在してをる。ヨヘルソンの「コリヤク」を見る、と、海コリヤク The Maritime Koryak のもつとも盛大な祭として鯨祭り即ち鯨送りをあげてをる。鯨の殺されるたびにこの「送り」がおこなはれる。然し主要なのは秋普通十月鯨が捕獲された後に行はれるものである。同書六六頁に次の如く氏はいつてをる。「鯨祭の主なる要素は次の觀念に基礎を置いてをる。

『殺された鯨は、村を訪づれ、暫く止まつて、その間大變敬はれ、かしづかれ、それから海に歸る、そして又次年人間の國に來る。彼はその受けた懇懃な待遇を親類共に説いて今度は一共につれだつてくる。コリヤクの考へによると鯨は、全ての他の動物同様緣續きのものからなつた一部族、むしろ一家族からなり村住いをしてをる。彼等はその成員の一人の殺害を復讐し、またその受けた好意に對しては感謝すると』。

鯨をとつた舟の持主が主人役となり、全村民をあつめて大饗宴を開く、これは二三日繼續し、自宅か又は村の最大の家屋で行はれる。ヨヘルソンの見た例により祭の有様を詳述するとまづみはりの女が鯨をとつて舟の歸るのを知ると女は踊衣装をつけ、爐から火の燃木をとつて海岸にゆく。之はおとづれるものが家族の爐にぞくするといふ意味で結婚式の場合家族のものが壻又は嫁を迎へにゆくにもまた同

様な眞似をする。老人もまた踊衣装をつけ、海岸に火をもやし、その周囲を鯨を迎ふるため踊りまはる。女の一人が赤楊の枝と供物の草とをとり、呪文を唱へてから、鯨の口にいれる。これは鯨を養ふことを表徴する祭儀である。祭の第一日は客人のためにあてられてをる。入口の左神座の中に鯨の木像をおき、その前に水をみたした杯をおき、水は毎日とりかへる。献物はその身體の一部である。祭の用意と、のふといろくの家族を代表する女が、一方の隅から他の隅へとうつり、小さい菓子 (pudding) からなる贈物を交換する。それが終ると主人と他の男が鯨の頭と二匹のあざらしの頭を入口から運びこみ、爐の片側の梁に懸ける。それから女は急に陽氣な聲で互ひに挨拶を交換する。「お客様が此處にいらつしやつた。」「どうかたびく來て下さい。」「海に歸つたらお友達にも私共の所にくるやうにいつて下さい。外の人たちにも貴方同様よい御馳走をいたしますから。」「私共はいつも澤山の漿果ベレーを持つてをります」など。そして板の上においてある菓子 (puddings) を指さす。爐の火は鯨の歸つてゆく海と考へられてをる。主人は白脂の一片をとり火になげこみ「神よ (Beig)」、これを貴方のために燐さます」といふ。それから脂の片を守り神の前に置き、口邊を脂で塗る。そして後一同食物を食ひ初める。最後にあざらしの肩胛骨をもつて占をする。一人の老人これを持ち、他の老人が燃ゆる炭をその上につむ。そして皆その裂目をみ、トふ。骨の長い側面と平行だとこれは山と陸をさすので不吉である。鯨のかへるためには海の方を指さねばならぬ。

第十五日目に鯨の歸國するのを送る盛大な式がおこなはれる。此日爐は祭壇とかはり、そこに草で編んだ旅行袋が置かれ、中に菓子(Puddings)を一杯入れてをる。鯨とあざらしの頭は祭壇の上に置かれてをる。供物の藁すげの草がそのまはりにかけてある。此日男はマスクをしないが、女は直接鯨と面することを得ざる弱者と考へられ、假面をして式をなす。即ち主人の二人の姉妹が假面をつけ、跪いて呪文をとなへ、菓子の皿をささげる。呪文をとなへてから、兄弟はその菓子をしらべ、そのなめらかな面にかきぬしつたあとがあると、之を靈は祭を嘉納した證據と考へる。すなはち鯨は海に歸り、その任務を果すと考へられるのである。鯨が歸るのを嫌がれば、饑饉が起るか他の凶害が起る。

その後二人の男が出てゆき、屋根に上り、長い革紐を家の中におろさせ、それに旅行袋と鯨とあざらしの頭がいはいはられる。これをあげるまへ、最後のトとして試しに持ち上げてみ、もし軽いと吉である。三日間食糧袋は屋根においてあり、それから菓子を食べ、草袋と假面は小さい倉にかけてをく。春になると荒野にもつてゆき、地上に棄てるか、木の枝にかけてをく。之を焼くのは禁ぜられてをる(Jochelem, Koryak, 66-76, The Jesup North Pacific expedition, VI)

熊送りも鯨と同様である。殺した熊が家にかつぎこまれるとき、女は火の燃木をもつて踊りつゝ熊を迎へに行く。熊の皮は頭と一共に剝がれ、女の一人は、皮をつけ、それでおどり、熊にたいしそのおこらないやう、彼等に對し好意持つやうにと懇願する。同時に肉を木の皿におき、「友よ召し上れ」といふ。

祭の間熊の形をした木像を、鯨祭のときの木の鯨と同じやうにもてなしかしづく。

熊の旅立ちの準備の日に海コリヤクはそのために特別の菓子をつくる。馴鹿コリヤク (The Reindeer Koryak) の方は、熊のため馴鹿をほふり、その肉を煮て、草袋の中に入れる。熊の皮は草で満して、とりだされ、家のまはりを太陽のうごく方角にぐるぐまはし、それから旭日の上る方向に送られる。

食物に供せられる動物を訪れる神と考へ、これを欸待し、盛宴をはつて同族と會食をするといふ習慣は、その食物が植物性のものであつても同様である。アイヌは食用植物が、人間に食べられることによつて神の國に戻られると考へてをる。

古代日本民族の新嘗の祭の如きも稻の初穂を神々と相嘗めして之を欸待し、來ん年の豊饒を約する儀式であつたらう。一般に未開人の間にあつては、祖先神に植物を豊饒にする力を歸してをる。皇室の祖先神には穀神の要素が融合してをる。天照大神を齋く伊勢神宮の外宮は稻の神、食物の神である。神欸待の日に物を惜み、神の怒りをかふやうなことがあれば凶害を蒙り、饑饉にあふと考へられてゐたのであらう。恐らくは神も人間と同じやうな生活をなしてをると信ぜられ、祭は、その神の國から訪れた客人に對する饗應であり、その幾層倍になつた御返しをあてにする行事であつたのであらう。

アジア北方諸民族の間に於て季節祭の神欸待は參列者の間に財産の分配交換を伴ふてをる。海コリヤ

クの鯨送りの儀式に相當する海チユクチユ The Maritime Chukchee の海神 Kere'tkun の祭は、かなり極端の「贈與」「交換」を伴ふてをる。ボコラスの「チユクチユ」を見ると之に關する詳しい記述が見出だされる。此祭は毎戸二、三日又は五日位ひ續く。(セント・ローレンス島では富める船持だけが此祭をなす。) 此日は家族全部あざらしの乾内藏からなつた軽い上衣を纏ひ、家の主人とその妻は特別の頭飾りをつけ Kere'tkun 及びその妻を真似る。それから Kere'tkun の網といふ臙からつくつたものを家の通風口からさげる。網のまはりにはあざらしの血で裝飾された鳥の像や小さい玩具の櫂が吊り下げられる。櫂の數は十二個であり、鳥は恐らくかもめらしい。海象かあざらしの頭が二三地上に安置される。神は木像であらはされてをる。爐の兩側に、鹿の皮を敷き、之が二つの内室を示してをる。その一つかまた寢室の中がケルトクンの座とされ、その上に選りぬきの油で満した大ランプをともすのである。神は此ランプの中に席をとり祭のはじまるのをまつと考へられてをる。食用根と莖からつくられ、油と肝とをませあはしたたくさんの菓子 (pudding) が式に必要と考へられてをる。その外あらゆる種類の食物が澤山會衆に分けられる。

初めの日には家族のものだけの日で、女が踊り、男が鼓をうつ、一同調子を各こととした歌をうたふ。二日目は客人の日で特にシャマンが鼓をうつてうたふ。三日目は女の日で、女があざらし、鼓をたたく。家にとまるケルトクン神のために老人か老婆が徹夜のみはりをしてをる。

最後の夕べ、馴鹿の丸身の肉が、幾つかのランプの上に下げられた大い釜の中に煮られる（そのランプの一つがケルトクンの座とされてゐるもの）。煮た肉は、客の中に分けられ、客は、之を家苞とする。比較的貧しい家族も式のため馴鹿の死骸を注意して用意してをく。ケルトクンの木像はランプの上で焼却され、家中注意深く掃除され、屑、落ちこぼれ、毛などは一共に集められ、ケルトクンの燈や小さい火から落ちこぼれた供物の屑と、共に海に投げこまれる。これが儀式の日まで殺された全ての漁獲物の海への歸國と考へられてをる。

多くの村に於て、此祭の第二日に所謂「贈物の交換」がおこなはれる。その方法にいろいろあるが最も普通の方法は、次の如くである。女の客が全ての種類の家具を持つて、寢室の入口に集まる。そしてそれを皮の壁の襞の下につきこみ、高聲で欲する物を要求する。主婦は、たゞちに、呈供されたものごとり、客人の要求したものでそれを取換へねばならぬ。時に呈供され、要求されたものは、何等の価値なきものである。たとへば老婦が、古い皮の一片をもつてきてランプの支へをかはりに請求する。これは交換が儀式の一部であり、客人側の友愛の特別の表現とされてゐるからである。之に反してもし客がなにか大變高價のものを要求する場合があつても迅速に、嫌な顔をせずわたさねばならぬ。もし主婦が、望みの品を持たないと、それを近隣から借り、客人の意を満さねばならぬ。贈物がなされた後そばにたつてをる人々は、いづれも順次に、その物を要求する権利を持つてをる。これを拒むといふことはよく

ない。かくて望ましい品は、家から持ち出される前二度も三度も所有者をかへる。

ある場所では子供が、成人のかはりに遣はされる。彼等は、家にはいつてきて主婦に對し「拒みなさるな……何某が某々の物を戴きたう御座います」と叫ぶ。主婦は要求された物を「タハー・タハー」と絶叫しながら授與する。その後彼女は、その自分の子をすぐ遣して、同等のものを要求する権利を持つてゐる。然し多くの場合彼女は、相手の式を行ふ時まで待ち、その機會を利用し、自分の贈物と同等のものを得んとする。

こゝに於ては若い人は、その顔を木面でおほひ、各戸を訪れ、いろ／＼の品物を無言の科で要求する。授與者は、即刻その子を遣して、同等のものを得るか、または、自分の若い人が、贈物を要求してよい番になるまでまつか何れかの権利を保持してゐる。セント・ローレンス島では若い男女の子供が、小い行列をつくりおどり、贈物主に食物をねだりつゝ、各戸をまはる。この習俗は、時には冬行はれ正規の祭と何等關係がない、そしてそのならばはは非常に上述の太平洋コリヤクと類似してゐる。

極北のチエクチュ村落においては、交換はしば／＼次の方法によつてなされる。祭の初日、鼓をたゞき歌ふ最中に、主人にぞくしてゐる持物を欲しがる客人は皆その左の手のひらをその右の拳で打ち、そして次の如く叫ばねばならぬ。「私は、何々を見る」と。主人は、たゞちに之を興へねばならぬ。そして

式が終つた後同等のものを要求してよい。要求されたものが、極めて高價であつたときには、主人は右の親指をその咽喉にあげ、「寧ろ我のごを切つた方がよい」と叫ぶ。然しこれは非常な無禮で、血なまぐさい復讐を惹起する場合がある。

多くの家族は、たゞ親戚、特に『複合結婚』(Complex marriage)の絆で結ばれたもの間で交換する。一人の男が妻を、自分とかゝる絆で結ばれてをる他の男のもとに遣し、或品物を要求する。暫くして他の男はその妻を同等のものを得んがために遣す。

儀式的交換の今一つの種類に *trading-dance* と呼ぶものがある。これは祭の第二日に『複合結婚』の縁でつながれた男女一對によつて行はれる。多くの場合男はたゞ見物し、その間女は、その面前で踊る。然し彼は、そのおどつてをる間足の下の地面に馴鹿の皮を敷いてやらねばならぬ。おどりの行はれてゐる間他の踊り手は、静かにしてをり、見物人と一共に見守つてをる。おどりおはると男は女に、なんらかの贈物をなさねばならぬ。そして次の晩彼等は共寝する。次の日前の女の夫と、男の妻は、同じやうな踊をなし、男は、前日の贈物と同等なものを與へ、新たに組合つた男女は、おのゝ次晩共寝する。

(Bogoras, *The Chukchee*, p. 386, 399, *The Jesup North Pacific expedition*, VI)

アイヌの間にも神送りは、同族の招待大饗宴贈興を伴ひ、かくすることによつて招待者は部落内にその勢力をたかめるである。アイヌの間に果して財物の分配が、チュクチュカコリヤクに於ける如く行は

れたかについては寡聞な自分は、まだ正確な材料を有してゐないが、その傳承の中には神送りに伴ふ饗宴について多少資料を呈供してくれるものがある。

知里幸恵譯著「アイヌ神謠集」中の「梟の神の自ら歌つた謠」はその一つである。謠の歌ひ手は梟の神自身になつてゐる。

梟の神が「銀の滴降る降るまはりに、金の滴降る降るまはりに」と云ふ歌を歌ひながら流に沿つて下り、人間の村の上を通りながら下を眺める。昔の貧乏人が今の金持になつてゐて、昔の金持が今の貧乏人になつてゐることに氣がつく。する。海邊に人間の子供たちが玩具の小弓と小矢をもつて遊んでをり、梟の神をみつづける。之を一番先に射つたものはほんさうの勇者だぞ」と云ひながら争ふて弓を射る。昔貧乏人で今金持になつてゐる者の子供等は金の小弓に金の小矢をつがへて梟の神を射る。神はなか／＼之をからだに當らせない。その中貧乏人の子らしい、しかしえらい人の子孫らしい子供が一人變り者になつて仲間入りをしてをり、普通の小弓に普通の小矢を番へて梟の神をねらふ。金持の子等は、之を散々に笑つてお前の様貧乏な子の普通の弓矢でどうして鳥神様の鳥がこれるものかといつてうつたり、蹴つたりする。梟の神は却てこの子に同情し、その小さい手を差しよせてさる(矢に當ること)。クル／＼風をきつて梟が舞ひ下ると子供達は一散に驅けはせて我勝に取らうとする。貧乏人の子はさきに驅けよせて之をさり、悪口をいつたり、押ししたり、たゞいたりする金持の子等の重圍をきりぬけて家に歸つてくる。子供は家の第一の窓から梟の神の中に入れ、その委細を物語る。する。家の中から老夫婦が出てきて梟を拜し「梟の神様、大神様、貧しい私たちの粗末な家へお出で下さいました事、有難う御座います。昔は、お金持に自分を數へ入れるほどの者で御座いましたが今はもう此の様につまらない貧乏人になりました。國の神様大神様お泊め申すも畏れ多い事ながら今日はもう日も暮れましたから、今宵は大神様をお泊め申上げ、明日は、たゞいナウだけでも大神様をお送り申し上げませう」といつて何遍も禮拜を重ねる。老婦人は、東の窓の下に敷物をしいて梟の神を安置し、

皆ぐつすり寝こんでしまふ。夜の間に梟の神は「銀の滴降る降るまはりに、金の滴降る降るまはりに」さいふ歌をうたひながら、此家の左の座へ右の座へ美しい羽音をたてて飛び、美しい寶物、神の寶物で家を一杯にし、ついでその家を大いかねの家に作りかへ、中を立派に飾りつけてしまふ。そして夢の中で家の人たちに「アイヌのニシバが運が悪くて貧乏人になつて、昔貧乏人で今金持になつてゐる者たちにはかにされたりいぢめられたりしてゐるさまを見て不憫に思つたので、身分の卑しいたゞの神ではないのだが、人間の家に泊つて、恵んでやつたのだ」さいふことを知らせる。

あくるあさ、家人は目をさまして變りはてた家の様を見て大いに悦び、泣いて禮をいひ、老人はイナウの木をきり、立派なイナウを作つて梟の神を飾り、老婦人は身仕度をして小さい子を手傳はせ、酒を造る仕度をし、一寸の間に六つの酒樽を上座にならべる。それから梟の神は火の老女老女神と種々な神の話を語り合つてゐる。二日程たつと神の好物なるゆえにはや家の中に酒の香が漂ひはじむ。そこでかの小さい子に慙さ古い衣物を着せて、村中の昔貧乏人で今金持になつてゐる人々を招待するため使ひにだす。子供が家毎に入つて使ひの口上を述べる。人々は大笑ひをし、貧乏人が御馳走をするのを不思議がつて大勢打連れてやつて來、遠くから家を見ただけで驚いてはづかしがり、其の儘歸る者もあり、家の前で腰を抜かしてゐるものもある。家の老婦人が、さういふ人々の手をさつて中に入れる。皆いざり這ひよつて顔を上げる者もない。する。家の主人は起上つてカクコツ鳥の如く美しい聲で委細を物語り「此の様に、貧乏人でへだてなく互に往來も出來なかつたのだが大神様があはれんで下され、何の悪い考へも私どもは持つてゐなかつたので此の様にお恵をいたゞいたのですから今から村中、私共は一族の者なるゆえ仲善くして互ひに往來いたしたう存じます」と申し述べる。人々は何度も手もすりあはせて家の主人に罪を謝し、これからは仲よくする事を話合ふ。梟の神も皆に拜され、それが濟む。人は皆心が柔らいで盛んな酒宴が開かれる。梟の神は、火の神様や家の神様や御幣棚の神様と話合ひながら、人間達の舞を舞つたり躍りをしたりするさまを眺めて深く興がる。二日三日たつと酒宴は終つたので、人間達の仲の善い様を見て、安心した梟の神は火の神家の神御幣棚の神に別れを告げ、自分の家に歸つた。神の歸る前にその家は美しい御幣美酒で一杯になつてゐる。それで近い神遠い神に使者をたてて招待し、盛んな酒宴を張り、席上神様たちへ梟の神が物語りをし、その一切の出來事を詳述する。神達

は、大變梟神をほめたゝへる。神達の歸る時美しい御幣を二つ三つ分配してやる。それからあのアイヌの村の方を見る。今はもう平穩で、人間達は皆仲よく、かのニシバが村に頭になつてをる。その小供は今日もう成人し、妻を持ち、子供も持つて父や母に孝行してをる、そして何時でも酒を造つた時は酒宴のはじめに御幣やお酒を梟神に送つてよこす。梟神も人間たちの後に坐して何時でも人間の國を守護してゐる………さ梟の神が物語つたさいふのが此神謠の大略である。

此神謠は、前に述べたアイヌの動物に對する態度を説明して興味あるが、同時にその社會觀を窺ふために格好の詩篇である。小供が梟の神を捕獲しそして老夫婦が親切に之を崇めかしづきとめたので、神は、一夜の中にその家を金持の家にしてしまふ。夫婦は子供と一共に大饗應をなし、村人に御馳走し、それによつてまた昔の勢力をとりかへす。神様もたくさんの土産を貰つて神の國にかへり、外の神々を招いて御馳走し、土産を頒ける。地上における饗宴は、天上における饗宴と相應じてをる。動物の捕獲は、神の訪れであり、その肉は、全てのものに頒ち與へねばならぬ。そしてかくわかつことによつて其人は勢力を復活する。神もまた盛大に送られれば神の間で富めるものとなり、人間に對し好感を持つてをる。この話は云ふまでもなく前述のアメリカ印度人の神話、即ち熊の恩惠で熊や山羊のトールテム飾章^{クレスト}を獲得した未弟が、豊富な食物を得、それで他人を養ひ、金持となり、財産大分配、即ちポトラッチで地位を確立するといふ型と同一形式に屬してをることは明瞭である。なほまたボアスは、チンシャン部族の中にある次の如き神話を採録してをる。

父母を亡へる貧しい子供が、祖母に養はれてをる。その母の兄弟が一人をり、これが村の酋長である。或時酋長は、天から落ちて家後の木の枝にかゝつた銅片を若者たちに射落さしめ、成功したものに娘を與へんと約束する。貧乏な孤兒は、見知らぬ人から貰つた小石の靈力で金持の息子達の邪魔にかゝはらず首尾よく之を枝から落す。金持たちは最初にその銅片を奪ひ取り、酋長の家に持つてゆく。酋長は更に白熊を射殺せしものに娘を與へんと約束す。白熊が出現するや孤兒は、蠅になつて先頭し、首尾よく之を殺す、金持の子等もその矢を熊の血で塗り、何れも我手柄なりといはる。然し娘の父は矢を檢して孤兒が眞正の勝者なるを知り、娘をその子にあたへ、自分の娘が貧しい家に嫁いだことを恥ぢて、全村を率ゐて移住し去る。後に残つた若者と酋長の娘と若者の祖母は餓死に瀕したが、若者は、夜ひそかに或湖水の汀に至り、その主なる大蛙を殺し、その皮をつけて、水の底に潜り、每晚魚を家に持ち歸る。ついに非常な金持となり、家は鯨や鮭や海驢などで一杯となる。數年を終て、娘の父なる酋長及びその村民は、食物がなくなり、饑えて元の村に歸つてくる。そして婿に澤山の食物を惠まれ、大いに悦ぶ。息子は或一日盛大なポトラッチを行ひ、貯藏食物で取換へ得た鹿皮と奴隸とを叔父によつて客人に分配せしめ、その際叔父から「名」を貰ふ。後一日彼は、遂に蛙の皮が身體に密着してしまひ、人界に歸れなくなり、永く水界にとゞまることとなる。然しそれでも魚や鯨やその他の水産物を妻とその子孫のため岸にうちあげてやり、村人にまで恩を及ぼす」といふ筋である。(Franz Boas, Tsimshian texts, P. 137-168, Bureau of American Ethnology. Bulletin 27).

此話がアイヌのそれと似てゐるのは、同じく貧しい主人公が、動物の靈力により食物に惠まれ、盛大なポトラッチをやつてえらくなるといふ點である。此話に見えるポトラッチは、命名式のポトラッチである。即ち財物を客人にわけ、祝宴を開くことによつて、主人公は、『名』を得、部族の中の有資格者となり得たのである。こゝにいふ話に主人公を保護する動物は、多くトートテム動物である。アイヌの神話に出てくる梟神もトートテムであつたらしい。梟トートテムの存在した痕迹については金田一氏もその「アイヌの

研究」(三十五頁)に指摘されてをる。

傳説の起源を考察すると極めて悠久な古へに遡り、古代部落生活の痕跡をその中に窺ふことが出来る。アイヌの傳説を通じてトーテムズム、ポトラッチなどの古い社會生活の名残りを見出だし得るごとく、常陸風土記の福慈筑波の傳説も古代日本人の持つてゐたごく古代の宗教觀念を現代人にかいまみさせてくれる。神は人界を訪づれ、之を饗することによつて人は食物の豊富な供給を契約することが出来る。訪れる神を敬ひ饗することにより一人は永久に飲食を保證され、之をこぼんだ一人は永久に氷雪に閉ざれてしまふ。此傳説の根柢には季節祭における神及び客人款待の深い宗教的信念が存してゐたのである。此福慈筑波の傳説が、自由な男女關係、財物の授受を伴ふかがひの風習と結びつけられてをるのも決して偶然でない。新嘗の祭には、もとやはり極北民族に見られるやうな分配交換を伴ふたからであらう。此種の祭には客神に對してのみならずあらゆる參列者に對し款待が極度におし及ぼされる必要があつたのである。トーテムズムにちかひ社會では、各人は動植物と密接な關係を持つてをり、祭りにその人を款待することは、その動植物を款待することに該當し、これによつて、その御返し、即ち來る年の收穫大漁を保證することが出来るかと考へられてゐるのである。(參照 Marcel Mauss, Essai sur le don, Forme archaïque,

L'Année sociologique, Nouvelle Série Tome I, J